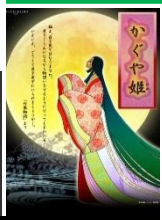


彩の歳時記

平成三十年 九月

今は昔、竹取の翁といふものありけり 野山にまじりて竹をとりつつ
万(よろず)のことにつかひけり 名をばさぬきのみやつことなむいひける
その竹の中に本光る竹一筋ありけり 怪しがりて寄りて見るに
筒の中光りたり それを見れば、三寸ばかりなる人 いと美しうてみたり



翁(おきな)が「かぐや姫」を見つける『竹取物語』の冒頭。紫式部が源氏物語の中で「物語の出来はじめの祖(おや)」と記したように童話『かぐやひめ』として有名な日本最古の物語で作者未詳。「かぐやひめ」は実は月の都の人で、ある満月の夜、月に帰ります。それまでに語られるエピソードの数々はU(ウ)のようで、物語の源と言われています。ここから始まる「物語」いうものが、千年以上も語り続けられていることに、日本の歴史の重みを感じます。九月は、異称が「長月」であるように月の最も美しい時期。秋の夜長、最古の物を、繕いてみては？

九月の暦

ながつき

ながつき 夜長月の略「釣瓶落とし・秋の夜長」など 夜が長くなったことを感じる。

一日 二百十日【雑節】立春から210日目。嵐が襲来する時期として恐れられたが、近年は温暖化の影響か、八月末には二十以上の台風が襲来、甚大な被害をもたらしている。

夏目漱石の「二百十日」は嵐で阿蘇山に登れなかった青年二人の会話が主体の小説。

一日 防災の日 1928年9月1日に起きた関東大震災を教訓として1960年に制定。



漱石の弟子で『三四郎』の野々宮のモデル、物理学者・寺田寅彦【1878～1935】の警句「天災は忘れた頃にやってくる」といわれるが、近年は天災が忘れないうちにやってくるようで、地球規模の温暖化へ危惧が高まっている。

八日 白露【二十四節気】草花に朝露がつくようになり、太陽が離れていくため、空もだんだんと高く。白露も夢もこの世もまぼろしもたとへていへば久しかりけり 和泉式部【973～1003】



和泉式部【973～1003】

九日 重陽の節句(五節句の一)奇数陽の数字の極、「九」が重なり重陽。菊は長生きの草とされ、奈良時代には菊酒を飲む宴が催された。

山中や 菊はたおらぬ 湯の匂 芭蕉「奥の細道」(山中温泉にて)



十七日 敬老の日 多年にわたり社会につくしてきた老人を敬愛し、長寿を祝う [第三月曜日]

十九日 子規忌 俳人・歌人・正岡子規【1867～1902】の忌日。辞世から糸瓜忌、獺祭忌。

糸瓜咲て 痰のつまりし 佛かな



獺祭(だつさい)とは、獺(たがわうそ)が捕らえた魚を岸に並べ祭りをするように 詩などをつくる時多くの資料等を広げちらす事で、子規は自らを獺祭書屋主人と号した。命名した「野球」に因み、上野公園内に「子規記念野球場」また、根岸に晩年を過ごした「子規庵」が現存。

二十日 秋の彼岸(二十日から二十六日)の入り。

二十三日 秋分の日【二十四節気】彼岸の中日。昼夜の長さがほぼ同じに。墓参りや祖先を供養する。

二十四日 中秋の名月・芋名月 月見をする風習は、中国伝来の行事。

名月や 池をめぐりて 夜もすがら 芭蕉

二十三日 月見の会「向島百花園」江戸時代から続く伝統行事。

萩のトンネル・秋の七草・お月見の祭壇、野点・篠笛の演奏など。

九月の歌 お月さまいくつ 詞 北原白秋【1885～1942】



沖繩民謡が源とするが、全国各地にさまざまな歌詞が存在。

「十三 七つ」は、十三夜(じゅうさんや)の七つ時(七時ころ)の出たばかりの月でまだ若い月の意味。または、「十三 一つ」であり、「13+1=14」で十四夜の月(十四日月)となり、その別名「小望月」(こもちづき) 卍満月のことを望月(もちづき)というが、望月の前夜

(陰暦十四日)の月からとも。白秋存命の頃、日本中で歌われていたもので

その歌詞も様々なものがあり、白秋はその日本全国の「お月さんいくつ」の歌詞を統合して自作の詩として纏めたといわれる。

お月さまいくつ 十三、七つ
まだ年や若いな
あの子を生んで、この子を生んで
誰にだかしよ お方にだかしよ
お方どこいった油買いに茶買いに
油屋の縁で氷が張って
滑って転んで、油一升こぼした
その油どうした
太郎どんの犬と、次郎どんの犬と
みんな舐めてしもた
その犬どうした 太鼓に張って
あっちの方でもどんどんどん
こっちの方でもどんどんどん